The Society for Studying Animal Medical Invention

SAMI NEWS

No.63
動物医療発明研究会
Winter 2023

少しずつコロナ対策も向上し、経済の動きも活発になりました。無料セミナーつきZoom総会に参加していただき、ありがとうございました。今回のニュースレターは、参加できなっかた会員のために概要を紙面でご紹介いたします。鍵和田先生のご尽力により、今回会員に限って、見逃し配信もできることになりました。ぜひのぞいてみてくださいね。

2022年度SAMIウェビナーセミナーが開催されました！

ZOOMを利用した動物医療発明研究会のWEBのセミナーが2022年10月23日開催されました。ZOOMによる総会は今年で2回目です。全国各地から、久しぶりの方や初参加の方を含め38名の参加者がありました。

会長挨拶

会長の清水動物病院院長、清水邦一先生による開会の挨拶で20時にスタートしました。

会計報告

続いて清水宏子先生より会計報告がありました。「黒字になってきたので、講演や記事については原稿料の支払いを予定している」とのことです。会計報告は参加者全員に承諾されました。

山口潤先生のピアノ

・赤とんぼ　・里の秋　・故郷

参加者の自己紹介

自己紹介のテーマは「マイブーム」。参加者それぞれがご自分のマイブームを約2分間ずつお話ししました。

特別セミナー

①『できる！！ウサギの麻酔』沖田将人先生(アレス動物医療センター）
②『すぐ見つかる簡単データ保存　ScanSnapとEvernoteを利用して』清水邦一先生・清水宏子先生（清水動物病院）
③『獣医は十医』木村章子先生（ふぅ動物病院）

閉会の挨拶

宏子先生からは各セミナーについて感想をいただきました。「できるウサギの麻酔」について、明日からウサギを見る病院がどんどん増えるといいと思った。「獣医は十医」については、統合医療で居心地のいい病院を目指したい。「すぐみつかる簡単データ保存」は初恋の人のラブレターはなくしたくないけれど見つかったら困ると思ったそうです。
さらに「自己紹介はリアルな学会に行った気分で皆さんに会えてとてもうれしかった、忙しい中遅くまで皆さんにお付き合いいただいて楽しい会になったありがとうございました」と参加者に感謝の言葉をいただきました。
「鍵和田さんのおかけで開催できてほっとしました。こんな形で来年もZOOMまたは対面でできたらいいと思っています。発明研究会をどうぞお願いします」と締めくくりました。

最後は山口先生の「故郷」「紅葉」「夕焼小焼」のピアノ演奏を聴きながら閉会しました。　（文責：アニマルライター 伊藤 悦子）

セミナーの感想　麻布大学獣医学部6年生　石飛花音

沖田先生のウサギの麻酔についての講演ではウサギが好きな私は、安全で簡単にできる麻酔とのことで、必死にメモしていました。ラップを活用したり、といった工夫はまさに発明ですね。そして何より先生の発表が体系立っていてとても分かりやすかったです。沖田先生の「うさぎちゃんねる」も拝見して勉強させていただきます。

清水先生のScan SnapとEvernoteを使った書類整理は画期的でした。私はとても紙類の整理整頓が苦手で、将来的にあった方がよさそうなものを机の端に溜めてしまう癖があって机の上が1週間ですぐにぐちゃぐちゃになります。先生方のやり方だと、捨てようか迷うものはとりあえずスキャンしておくと捨てれるので、私でもできそうです。なんでも取り込んで、タイトルは検索しやすい名前にしておけば、検索機能があるので分類しなくていいというのが取り組みやすくてミニマリストに一歩近づけた気がしました。

木村先生の中医学についての講演は、普段西洋医学のみの大学の授業では聞いたことのない内容ばかりでした。鍼灸、漢方、ホメオパシーなどは科学的根拠を重視する西洋医学では証明できないものなのかもしれませんが、よく漢方薬に助けられていて効果を実感する私としてはとても興味深かったです。先生の「場」を大切にするという考えにもとても共感できて、これから働いていくうえで忘れないようにしたいと感じました。

先生方のお忙しい中、ためになって素敵なプレゼンをありがとうございました。

『できる！！ウサギの麻酔』沖田将人先生

アレス動物医療センター（富山県）

YouTubeの「うさぎちゃんねる」も大人気。

「犬猫メインの獣医師でもできるウサギの麻酔」として、次の3点を考えました。

・特殊な医療機器がいらない
・特殊な技術がいらない
・経験値に左右されない

それが「ケタミン持続輸液麻酔」であり、沖田先生の病院では過去5年間で10歳未満のウサギ350例で死亡率はゼロという驚異の麻酔方法です。

必要な医療器具「留置針（できれば24～26G）」と「シリンジポンプ」の2点のみになります。

必要な技術は次の3点です。

・元気なウサギへの皮下注射
・大人しいウサギへの筋肉注射
・麻酔下での血管確保

麻酔の流れ

1. （前投与）メデトミジンSC
2. （導入麻酔）
   ケタミンまたはアルファキサロンIM
3. 血管確保
4. ケタミン混合乳酸リンゲルの静脈持続輸液（維持麻酔）
5. 手術実施
6. アチパメゾールIV（覚醒）

必要な薬品

- メデトミジン（1mg/ml）：0.25ml/kg（SC用0.25mg/kg）
- アチパメゾール（5mg/ml）：0.25ml/kg（IV用1.25mg/kg）
- ケタミン（10mg/ml）またはアルファキサロン（10mg/ml）
  - ✓0.2ml/kg（IM用：10mg/kg）
  - ✓0.1ml/kgを乳酸リンゲル5ml/kgに混和、10ml/kg/hrで静脈持続輸液（30分の持続輸液用：30分あたり5mg/kg）

薬用量データが必要な方はalles@usagi.cnへお問い合わせを

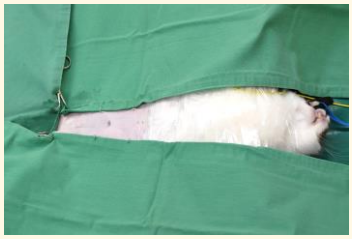
沖田先生は「病院に来た1年未満の新人でもできる方法を考えるのが趣味」とのこと。実際、メデトミジンを皮下注射後10分ほど経つとウサギはおとなしくなるので、誰でも筋肉注射が打てる状態になります。

麻酔前のウサギはほとんどの場合、顔（上半身）をバスタオルで隠すと大人しくなります。。

ケタミンまたはアルファキサロンの筋肉注射後約3分でウサギは横になるので、血管確保し留置針を入れます。沖田先生は橈側皮静脈を露出させますが、耳からでもよいとのことです。

留置針を入れる際は18ゲージの針で切皮（カットダウン）、さらにモスキート鉗子で鈍性に血管周囲の組織を分離します。 薄皮一枚残さず剥離することがコツで「血管を露出させるほうがよい」というアドバイスをいただきました。

ウサギの毛は大変刈りにくく広範囲に刈ろうとすると大変時間がかかるため、必要最低限を刈ります。毛を刈っていない部位にはラップをかけた状態で、消毒もラップごと行います。



避妊手術の際にラップで覆った部分を露出させるのは、手術中胸の動きを見るためです。

メリット

✓特別な機材や技術、経験値は必要ない→設備投資しなくても大丈夫
✓整形外科手術でも急な覚醒が起きない
✓手術中の麻酔管理ほとんどいらない（イソフルランのように呼吸の管理をしなくてもよい）
✓顔周りの手術でも気管チューブが邪魔にならない（目やあごなどの手術）
✓術中の体位変更も可能

デメリット

✓開胸手術、横隔膜ヘルニアは不可
✓ケタミンのほうが安定性は良いが、余ると処理に困る（麻薬手続きが必要であり、余ると廃棄処分など処理に手間がかかる）
✓どう考えても気管チューブを挿管したほうが安全

「子宮がん」はウサギの三大疾病のひとつで、6歳で80％のウサギが罹りますが「1歳までに避妊手術をすれば撲滅できるはず。
　ただし撲滅するには、ウサギの手術に慣れた病院だけの対応では足りないとのことです。「飼い主さんが避妊をさせたいと来院したときに、2軒に1軒でも受け入れてくれる動物病院があればウサギの子宮がんはなくなるはず。行いやすい麻酔法の一つとして、参考にしていただいて、一般の犬猫の先生が将来ウサギの避妊に参加してくださるときに役立つといい、と締めくくりセミナーは終了しました。

『獣医は十医』木村章子先生

ふぅ動物病院（東京都青梅市）

　東京都獣医師会のなかで最も西に位置する「ふぅ動物病院」では、コンベンショナルな治療はもとより、鍼灸、漢方、ホメオパシー、ホモトキシコロジー、バッチフラワーレメディ、オゾン療法などホリスティック療法も用いて統合的な治療を目指して実践しています。
　「ふぅ」の由来は先生が学生時代から飼っていた猫「ふーちゃん」。患者さんたちからは、あたたかな春風のような「ふぅ」、ほっとする「ふぅ」、魔法のような「ふぅ」、と親しまれています。
　パートの看護師が2名でうち1名は産休中のため、看護師が帰宅後も1人で仕事をされることもあるそうです。一般的な診察のほか山梨や埼玉県境への往診や、学校飼育動物指導も行っています。最近はグリーフケアにも力を注いでいます。

〇越智先生の教え

　タイトルでもある「獣医＝十医」は先生のモットー。これは大学1年生のとき受講した「獣医学概論」第一回目の講義での越智勇一先生の言葉です。
　当時学長でもあった越智先生は「獣医は牛馬豚犬のほか、小動物や海の生き物など十におよぶ数の動物をみなければならない」とし「そこには飼い主さんや農家さんも含まれる」とおっしゃったそうです。
　木村先生は「獣医師は、動物だけでなくかかわる人も診る」ことに感銘を受け「獣医=十医」をモットーとして診療に臨んでいます。

〇「ホリスティック療法｝とは

　木村先生は獣医師として10年目、西洋医学などに治療と思考の疑問と限界を感じホリスティックを学び始めました。最近では波動療法であるホメオパシーの講師を獣医師向けに毎年行っています。
　受講する獣医師にとっては初めての学びなので「あくまでもコンベンショナルな学びを基本とし、獣医師としての常識と経験、判断、倫理観をもって用いるべき補完療法である」と伝えています。

〇レメディの入った「魔女の引き出し」

　ここで「魔女」と呼ばれる先生の薬剤が並んだ「引き出し」の一部をみせていただきました。
緊張やパニックのときに先生も飲んでいるという「バッチフラワーレメディー」もはいっています。

レメディーとは、ドイツの自然療法でもあるホメオパシーレメディーとホモトキシコロジーの製剤です。ホメオパシーは1796年にドイツ人医師サミュエル・ハーネマンが編み出した治療法で「類をもって類を癒す」という「類似の法則」「ごく微量投与の法則」「ホリスティックの考え方」の３つが基本原理としています。　レメディーの数は3,000以上あるともいわれていますが、すべてを覚えているわけではないそうです。よく使う代表的なレメディーや「性格、遺伝的資質、症状、どんなときに良くなるか、悪くなるか」などを踏まえ、辞書やコンピューターを使って検索してきます。

さらに、ふぅ動物病院でメインに使用しているホモトキシコロジー製剤の紹介がありました。ホモトキシン製剤は、１つの病気症状に対して1つのレメディーを選ぶクラシカルなホメオパシー療法とは異なり「混合製剤」です。従来の西洋医学製剤と同様にアンプル剤や錠剤、液剤、軟膏などがあります。デトックス効果があって副作用がほとんどなく、免疫力を高める治療効果が期待されるものです 。

ホモトキシコロジーはドイツ人医師レケベック博士によって編み出されました。人間や動物は常に様々な病原性因子や毒素に侵されているという考えから、毒素をホモトキシンと名付け、中和解毒、排出する療法です。

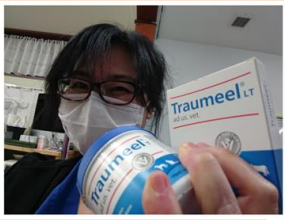
ホモトキシコロジーの基本原理は次の4点です。

・炎症を抑制すること　・結合組織を解毒すること
・器官機能を改善　　・免疫系を増強すること

デトックス効果があるので、主に猫のCKD（慢性腎臓病）。高齢動物の神経症状、ウサギや身体の小さいエキゾチックアニマルに大きな手ごたえを感じているそうです。ホモトキシコロジー製剤で食滞改善されるほか、輸液をしながらレメディーを混合してウサギに注射して改善をはかるなどしています。診断はコンベンショナルと同様、検査を踏まえた上で行っています。

コンベンショナルな薬剤や漢方、ホリスティック製剤と他の薬剤と併用してもケンカすることがなく、身体に優しく作用するのも特徴です。

今回「Traumeel（トラウメール）」という製剤を紹介されました。消炎効果がある製剤でステロイドの量を軽減、または中止も可能になっています。



【メインはホモトキシコロジー】

さらに、心と体は一致するものとして、メンタルの一助にバッチフラワーレメディーを緊張やパニックのときに使うそうです。「バッチフラワーレメディー」はホメオパシー医でもあった、エドワード・バッチ博士が開発した草花の波動エネルギー療法です。

手術のときや怖がりの子、興奮しやすい子、初めてあずかる子に応用でき、時には飼い主さんにも飲んでもらうときがあるとお話がありました。

バッチフラワーレメディーはメンタルの状態に合わせて38種類あります。動物の問題行動には何らかのメンタルの問題があったり、グリーフなど飼い主さんのストレスが動物に大きな影響を与えたりします。心と体の両面を見ることで病気治癒につながるもので、副作用や習慣性がない癒す療法です。

動物医療発明研究会会員の橋本先生にも教えてもらったこととして、漢方など中医学での教えに「母子同服」があります。これは「母と子はリンクするから、同じ薬を服用しなさい」という教えです。

まさに飼い主さんと動物も同様、セッションしながら場合によっては同じようなレメディーをとってもらうときもあるそうです。

【母の教え】とは

老衰で他界された先生のお母様の教えについてもご紹介いただきました。お母様は23歳の時から54年間スナックを経営していた方です。経営者として大事にしていたのが「場」でした。お母様は「お酒だけを売っているだけではない、雰囲気を売っている」と常々おっしゃっていたそうです。そして「スナックの場はお金以上の学びと気づきと価値がある」ともお話ししていました。

先生も「いくら高価な薬を用いても、高度技術を用いてもその場がよくなければ効果は発揮できない」と考えています。

★「すぐに見つかるデータ保存」(清水動物病院)は次号でご紹介いたします。

【自己紹介】

阿妻則道
株式会社OPUS
代表取締役
TEL 042-401-0395

いつも大変お世話になっております。この度、動物医療発明研究会に入会させていただくことになりました株式会社ＯＰＵＳと申します。本紙面をお借りしてご挨拶させていただきます。
弊社は、X線画像取得装置のフラットパネルディテクタや歯科センサー及び関連機器を取り扱っております。動物の検査負担軽減や快適なワークフローを実現するため、X線撮影画像の取得のみならず、診察室ビューアやデータ管理など、多様化するシステムづくりをご提案させていただきます。技術開発経験とＰＣやネットワークに深い知識を持ったスタッフを揃えた小集団企業でございますが、会員の先生方からのアイデアもいただきながら、目的実現のお手伝いをさせていただければうれしく思います。
私どもＯＰＵＳ社は、創造企業を目指し、動物医療に携わっておられる先生方と応援し共に繁栄して参りたく存じます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

動物医療発明研究会のホームページできています。登録もできます。

会員の病院・施設名、〒、住所、TEL、FAX、ホームページURLを掲載します。

ご希望の場合は、件名に「SAMI-HP掲載希望」と明記して、下記のメールにお願いします。

hp@ispecial.co.jp ㈱アイ・スペシャル運営受託

SAMI NEWS　63号
発行日　2023年1月
発行所　動物医療発明研究会事務局
発行人　会長 清水 邦一
事務局　230-0061横浜市鶴見区佃野町3-3
清水動物病院内　清水宏子
TEL(045)583-3738　FAX(045)583-3594